

1 見「あらハル・あらハス・まみユ・ラル・る」

あらハル・あらハス…あらわれる。姿を見せる。
まみユ…お目にかかる。
ラル・る…される。受け身の助動詞。

2 為「ためニ・たり・つくル・ナス・ナル・ラル・る・をさム」

ためニ…のため。
たり…である
つくル…つくる。
ナル・ナス…とする。する。
ラル・る…される。受身の助動詞
をさム…おさめる。

3 之「これ(レ)・の・ゆク」

これ(レ)…代名詞として何かを指している場合と、あまり意味のない場合がある。後に「ヲ・ニ」等の送りがある場合は「レ」を送らず、ない場合は「レ」を送るのが普通。
の…助詞の「の」。連体修飾語や主語を表したりする。
ゆク…動詞。行く。

4 与「あづカル・あたフ・くミス・と・ともニ・よりハ・か・かな」

あづカル…関わる。関与する。
あたフ…あたえる。日本語とほとんど同じ。
くミス…仲間になる。たすける。政府与党というときはこの用法。
と・ともニ…一緒に。ともに。くと。
よりハ…よりは。比較・選択。
か・かな…か。くだなあ。疑問・詠嘆の終助詞。

5

夫「か・かな・かの・それ」

か・かな…か。…だなあ。疑問・詠嘆の終助詞。
かの…あの。例の。
それ…そもそも。いつたい。

6

如「ことシ・しく・もし・ゆく」

7

若「ことシ・しく・もし・なんぢ」

「如」と「若」は「ことシ・しく・もし」の三つの読みが共通である。

ことシ…のようだ。

しく…ほとんど否定の「不如」「莫如」のかたちで、…に及ばない。…に及ぶものはない。
もし……ならば。

ゆく…行く。(如)

なんぢ…おまえ。君。(若)

8

将「はタ・ひき丸・まさニ〜()ント()す」

はタ…そもそも。それとも。いつたい。

ひき丸…ひきいる。

まさニ〜()ント()す…しそつだ。…しそつと強ひ。

9

且「かつ・しばラク・まさニ〜()ント()す」

かつ…そのうえ。しかも。

しばラク…とりあえず。まあまあ。

まさニ〜()ント()す…しそつだ。…しそつとする。」「将」に同じ。

10

宜「むべ()うべ()ナリ・よろシ・よろシク〜ベシ」

むべ()うべ()ナリ…もつともな()ことである。

よろシク〜ベシ…しするのがよい、適当だ。

よろシ…よい。よいだろつ。ふさわしい。

11 而「置き字・しかうシテ（しかシテ）・しかモ・しかルニ・しかレドモ・なんぢ」

「なんぢ」以外の読みは接続の用法。順接、逆接両方ある。
なんぢ…君。お前。そなた。

12 爾「しかり・なんぢ・のみ」

しかり…そうである。その通り。
なんぢ…君。お前。そなた。
のみ…だけ（だ）。

13 是「ここ・この・これ・ゼナリ」

ここ・この・これ…ここ、この、これ、それ。
ゼナリ…正しい。

14 斯「ここニ・この・これ・すなはチ」

ここニ…ここで。場所や状況を表す場合と、「すなはチ」と同じく接続を表す場合とがある。
この・これ…この、これ。「此」に同じ。
すなはチ…「則」にほぼ同じ。

15 者「こと・は・もの」

こと…こと。事柄。
は…は。とは。
もの…は。者。物。人。こと。とき。わけ。

16 焉「いづくニカ・いづくソ・（えん）・これ」

いづくニカ…どこに。場所を問う。
いづくソ…どうして。理由を問う。
（えん）…文末の断定の字。ただしその場合は置き字で、「えん」と読むことはない。
これ…これ。「於此」に等しい。

17

悪「いづクニカ・いづクンゾ・にくム」

いづクニカ…どこに。場所を問う。
いづクンゾ…どうして。理由を問う。
にくム…憎む。嫌う。音読みは「ヲ」

18

以「もつテ・もつテス・ゆゑ」

もつテ…くを。くで。くに。くによつて。手段・方法・対象・理由等を表す。そして。
もつテス…くによつてする。くでする。くを以てくする「を逆にして」くするにくを以てす」となる。
ゆゑ…わけ。理由

19

惟「おもフ・これ・たダ」

おもフ…思う。考える。
これ…これ。文頭、文中において口調を整える。
たダ…ただだけ。

20

自「おのづカラ・みづカラ・より」

おのづカラ…自然と。ひとりで。
みづカラ…自分から。自分を。
より…くから。くより。

21

即「すなはチ・つく・もし」

すなはチ…すぐに。とりもなおさず。
つく…(地位・位置)につく。接する。近づく。
もし…もしも。

22

故「ことニシテ…わがと。わがわが」

ことニシテ…わがと。わがわが。
ふるシ…年を経たもの。以前にあったこと。馴染みのもの。
ゆゑ…だから。そついつわけで。

23

謂「いフ・おもへラク」

いフ…言う。言うことには
おもへラク…思うには〜と。〜と思う。(「以為」も「おもへラク」と読む。)

24

已「すでニ・のみ」

すでニ…もはや、すでに。
のみ…だけ(だ。)

25

事「ことトス・つかフ」

ことトス…つとめる。専念する。
つかフ…仕える。

26

卒「つひニ・にはカニ」

つひニ…とつとう、結局。
にはカニ…あわてて。いそいで。突然。

27

直「たダ・なほシ」

たダ…ただ〜である。
まっすぐ。ただし。正直。

28

徒「いたづラニ・たダ」

いたづラニ…むだに。
たダ…ただ〜だけだ。

29 毎「じとニ・つねニ」

「じとニ」…「じとに」。そのたびに。
 つねニ…「つねに」。

30 可「かなり・べシ」

かなり…「できる」。～してよい。まあよい。
 べシ…「できる」。～してよい。～するがよい。

三 名詞 (1) 和漢異義語

31 鬼「き」

死者。死者の魂。幽霊。妖怪。神。桃太郎に出てくる「おに」ではない。

32 故人「こじん」

友人。旧友。日本語の「死んだ人」とは異なる。

33 大丈夫「だいじょうぶ」

意志が強く立派な人物。一人前の立派な男子。日本語では、「だいじょうぶ」と読み、「確
 実・まちがいのないこと」を表す。「大」をとった「丈夫」も漢文では「一人前の男子」と
 という意味だが、日本語では「強いこと・健康」という意味になる。

34 百姓「ひゃくせい」

人民。民衆。日本語の農民を表す「ひゃくしょう」ではない。まさしく百の「姓」のこと。
 中国人の姓は一字が多いので、日本に比べると「姓」の種類が非常に少ない。

三 名詞 (2) 人称 (一)

35 「己」おのれ」

自分、自己。

36 寡人「かじん」

諸侯の自称。徳の少ない人の意。「孤」も同様に用いられる。自分・私。

37 孤「こ」

王侯の自称。字の本来の意味は孤児。自分・私。

38 妾「しょう」

婦人のへりくだった自称。

39 朕「ちん」

自分。私。古代の一人称代名詞。秦の始皇帝が天子の自称とすることに定めてから、天子専用の一人称となった。日本でこの一人称を用いることが出来るのは天皇だけである。

40 予・余「よ」

自分・私。

三 名詞 (3) 人称 (二)

41 子「し」

男子の敬称。先生の意。呼び掛けとして使うときは、「あなた」という丁寧な言い方になる。

42 小子「しょうし」

おまえたち。弟子に対する呼び掛け。

43 足下「そつか」

あしもと。人に対する敬称。貴下。

44 女・若・爾・汝・乃・而「なんぢ」

おまえ。君。

45 二三子「にさんし」

諸君。おまえたち。弟子によびかける語。

46 陛下「へいか」

天子の敬称。

三 名詞 (4) 呼称

- 47** 字「あざな」
中国人は姓名の他に、二十歳になったとき、呼び名として字というものをつける。名は本人が用い、他人を呼ぶときには字を用いるのが普通である。有名な詩人の例を挙げると、杜甫、字は子美、したがって杜子美という言い方もできる。
- 48** 諱「いみな」
死者の生前の本名。死んでからは諱（おくりな）で呼ぶべきで、名は忌むので、「忌み名」の意である。
- 49** 諡「おくりな」
死者の生前の業績を称えてつける名のこと。また、おくりなをつけること。
- 50** 号「ごう」
雅号。ペンネーム。有名な人物を例に挙げると、李白、字（あざな）は太白、号は青蓮居士（せいれんこじ）。

三 名詞 (5) 人物 の 1

- 51** 夷狄「いてき」
中国周辺の異民族をさげすんで呼ぶ総称。夷・蛮・戎・狄（東夷・南蛮・西戎・北狄）の略称。
- 52** 燕雀「えんじゃく」
つばめと、すずめ。小人物のたとえ。
- 53** 客「かく」
まろつど。たびびと。いそつろつ。
- 54** 兄弟「けいてい」
きょうだい。また、広く他人を親しんで呼ぶ。我国での普通の読みは「きょうだい」だが、これは呉音で、漢文では漢音で読むことになっているため、「けいてい」と読む。
- 55** 鴻鵠「こうこく」
おおとり。大人物や英雄のたとえ。
- 56** 胡虜「こりょ」
西北のえびす。匈奴をさす。「虜」は敵をのしる言葉。

三 名詞 (5) 人物 の 2

- 57 孺子「じゅし」
幼児。こども。年若い者や未熟の者を卑しんでいう言葉。
- 58 聖人「せいじん」
知徳の優れた最高の人格者。また、天子の尊称。
- 59 壮子「そうし」
気力のさかんな男。
- 60 弟子「ていし」
年少者。父兄に対して言う。門弟。でし。漢文は漢音で読むのが通例となっているため、「ていし」と読む。
- 61 朋「とも」
ともだち。同じ師につく学友。
- 62 夫子「ふうし」
先生。男子の尊称。妻が夫を呼ぶ言葉。
- 63 不肖「ふしょう」
愚か者。父祖に似ない者の意。子が親の喪に服しているときの自称。

三 名詞 (6) 君臣役職 の 1

- 64 君「きみ」
君主。主君。二人称として使うことももちろんあるが、君主としての用法のときに、日本語の感覚の二人称で考えているとおかしなことになるから注意する必要がある。
- 65 君子「くんし」
徳の高い立派な人。為政者を言うこともある。
- 66 卿「けい」
本来は、臣下の中で大夫・土の上に位置する者。きみ・くげ。執政の大臣。高位高官者。貴人。二人称代名詞としても用いることがある。
- 67 左右「さゆう」
おそばのもの。側近。君主の「左」や「右」の近くにいるところから。
- 68 士「し」
もともとは卿・大夫と並んで、天子や諸侯の臣下のうちの最も下に位するもの。下級の役人や、官吏の総称としても用いる。大夫と併せて士大夫という呼び方で読書人・知識階級を指すこともある。また、男子の美称としても用いる。
- 69 上「しょう」
天子。

三名詞 (6) 君臣役職 の2

- 70** 丞相「じょうしょう」
宰相。総理大臣。天子を助けて政治を行う最高の官。
- 71** 小人「しょうじん」
つまらない人間。とるにたりない人間。君子の対。
- 72** 臣「しん」
臣下、家来。また、私、一人称、謙遜して言う。
- 73** 大夫「たいふ」
卿・大夫・士と三者並べて天子や諸侯の臣下を言う。広く官職のあるものに対する尊称としても用いる。士大夫という呼び方で、読書人・知識階級を指すことも多い。
- 74** 天子「てんし」
天下全体の君主。天帝の子の意。中国の皇帝をこう呼ぶ。「天使 (angel)」ではない。
- 75** 天帝「てんてい」
宇宙を支配する神。造物主。
- 76** 布衣「ふい」
官位のない人。平民、庶民。

三名詞 (7) 一般 の1

- 77** 朝「あした」
あさ。翌日ではない。
- 78** 苛政「かせい」
厳しい政治。税金、刑罰などが人民にとって酷である政治。
- 79** 京師「けいし」
みやこ。
- 80** 逆旅「げきりよ」
やどや。旅館。旅人を迎える意。「逆」の読みが「ぎゃく」でなく「げき」なのは漢音で読むため。
- 81** 乾坤「けんこん」
天地。乾が天、坤が地。
- 82** 孝「こう」
祖先によく仕えること。父母を敬愛し、仕えること。
- 83** 光陰「こういん」
時間、年月。

三 名詞 (7) 一般 の 2

- 84 恒産「こうざん」
一定の生活手段。なりわい、生業。
- 85 恒心「こうしん」
一定不変の道徳心。
- 86 社稷「しゃしよく」
土地の神と五穀の神。国家の最も重要な守り神。転じて国家。
- 87 城「しろ」
都市を取り囲んだ壁のこと。内城を城、外城を郭という。転じてまち。日本の大名の住んでいる城とはイメージが異なる。
- 88 人間「じんかん」
世間。世の中。日本語の人間 (human being) とは違ふ。
- 89 為人「ひととなり」
人柄。性質。
- 90 邑「ゆい」
みやこ。くに。むら。

四 動詞 の 1

- 91 遊「あそぶ」
でかける。まじわる。たわむれる。「遊学・遊説」等の言葉があるように、日本語の「あそぶ」ではとらえられない部分がある。
- 92 中「あたるとしん」
あたる。あてる。的中する。
- 93 過「あやまし」
あやまち、まちがえる。しくじる。
- 94 更「あらたむ」
あらためる。変える。
- 95 諫「いさむ」
いさめる。忠告する。直言して目上の者の悪事をやめさせる。
- 96 詣「いたる」
ゆく。訪れる。到着する。
- 97 曰「いふ・いはく」
〜が言うには。言うことには。

四 動詞

の 2

98

云「いフ」

言う。

99

以為「おもへラク」

思ふことには。〜と思つ、考える。

100

居「おル」ト

〜たつて。経過して。

101

膾炙「かいしヤス」

なますと、あぶりにく。人々の口にのぼり、もてはやされること。

102

叩頭「こうとうス」

ぬかずく。頭を地にたたきつけておじぎをする。

103

対「こたフ」

お答えする。主として、目下の者が目上の者に対して返答するとき用いる。

104

弑「しいス」

殺す。目下の者が目上の者を殺すときに用いる。

105

除「じよス」

新しい官職に就ける。

四 動詞

の 3

106

前「すすム」

進む。前へ出る。

107

賜「たまフ」

与える。目上の人が目下の人に物を与える。

108

足「たル」

〜することができる。〜するに（すれば）十分である。

109

誅「ちゆうス」

せめる。とがめる。罪をせめて殺す。

110

封「ほうズ」

領地を与えて諸侯とする。

111

征「ゆく」

行く。

112

説「よろこブ」

喜ぶ。「悦」に同じ。

五 形容詞・形容動詞

の 1

113 殆「あやふシ」

あぶない。危険である。

114 衆「おほシ」

多い。

115 難「かたシ」

難しい。しにくい。

116 罔「くらしシ」

無知なさま。ぼんやりする。

117 鮮・寡「すくナシ」

少ない。

五 形容詞・形容動詞

の 2

118 工「たくみナリ」

たくみである。巧。

119 碧「みどりナリ」

あお。みどり。あおみどり。

120 易「やすシ」

たやすい。ししがちである。

121 少「わかシ」

若い。

122

拳「あゲテ」

全部。こぞつて。

123

敢・肯「あへテ」

思い切つて…する。…しよつとする。

この二つの「敢・肯」は同じように用いられるときもあるが、厳密には次のような区別がある。

敢…あえて、押し切つてする。

肯……することを望む、承知する。

124

新「あらタニ」

あたらしく。…したばかり。…してまもない。

125

或「あるイハ・あるヒト」

ことよつたら、もしかすると。ある人。

126

聊「いささカ」

ちよつと、ひとまず。かりそめ。

127

吉「いつニ」

いったん、ひとたび。ひとえに、まことに。

128

転「うたタ」

いよいよ。ますます。

129

各「おのおの」

それぞれ。ひとりひとり。

130

徐「おもむロニ」

ゆっくり。おだやか。しずか。

131

曾・嘗・常「かつテ」

(以前)…したことがある。

132

還「かへッテ」

反対に。逆に。あべこべに。

133

莞爾「かんじトシテ」

にっこりと笑う様子。

134

畢・夙「ことごとク」

みな。ことごとく。

六副詞

の3

135 屢・数「しばしば」

しばしば。度々。何回も。

136 頃・姑・暫「しばらく」

しばらく。まもなく。わずかの時間。

137 須臾「しゅゆニシテ」

しばらくして。

138 頗「すごぶル」

すこし。かなり。

139 既「すでニ」

もはや、すでに。…した上に。現に…した。

140 渾「すべて」

すべて。すっかり。

141 径「ただチニ」

すくに。

六副詞

の4

142 乍・忽「たちまち」

突然。にわかに。不意に。「乍」は重ねて用いると「…したかと思つと…する」という意味になる。

143 会「たまたま」

ちよつとどその時。折りよく。

144 具「つぶせニ」

くわしく。詳細に。具体的に。

145 俱「ともニ」

ともに。…と一緒に。

146 遽「にはカニ」

あわてて。いそいで。突然。

147 果「はタシテ」

予想どおりに。いったい。もし。

148 甚「はなはダ」

はなはだ。たいそう。

六 副詞 の 5

149 窃「ひそかに」
こっそりと。おそれながら。

150 方「まさニ」
ちょうど、その時。いまや。

151 尤「もっとも」
もっとも。はなはだ。ずばぬけて。

152 固・素「もとヨリ」
もともと。元来。

153 差・稍・良・少「やや」
多少。すこしは。

154 漸「ようやく」
だんだん。しだいに。

155 纔・才「わずかに」
やっと。すこし。

七 助字 の 1

156 相「あひ」
たがいに、ともどもに。あいてを(に)くする。(一)一方的に

157 所謂「いはゆる」
いわゆる。言つといるの。

158 今「いま」
今。現在。話題転換。仮定。ちょうど。さて。ところで。もし。

159 於「(お)」
時・場所・起点・対象・目的・比較・受身などを表す。「おいテ」「おケル」と読むこと
もあるが、置き字として読まないことの方がずっと多い。

160 如レ此・如レ是・若レ此・若レ是・如レ斯・若レ斯「かくノことシ」
このようである。

161 蓋「けだシ」
おそらく。思うに。推測する語である。

七助字 の2

162 維「これ」

これ。それ。調子を整えるために用いることもある。

163 諸「これ」

文中にあるとき…「之於」に等しい。

文末にあるとき…「之乎」に等しい。

164 其「その・それ」

その。この。単純に名詞を修飾する場合と、従属節の主語となる場合がある。「それ」は強意で用いることが多い。

165 抑「そもそも」

さて。いったい。発語の字。

166 所「ところ」

用言を体言化する。……すること、もの。行為の対象を表すことが多い。

七助字 の3

167 用「もって」

…を。…で。…に。…によって。「以」に同じ。

168 已矣（乎夫哉）「やんぬるかな」

もうだめだ。もはやこれまで。

169 所以「ゆゑん」

わけ。こと。もの。大別して、原因・理由を表す場合と、手段・方法を表す場合がある。

170 能（不レ能）「よく（あたはず）」

よく……できる。あたはず……できない。「不」がつくと読みが変わることに注意。

171 従「より」

…から。…より。

172 因「よりて」

もとづいて。たよって。その機会に。